



WASEDA ROPE

「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

広島県フォーラム 報告書

2017（平成29）年1月20日（金）に、「スポーツ庁 オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」広島県フォーラムが開催されました。広島大学の齊藤一彦教授がコーディネーターを務め、シンポジストにオリンピックの荻野正二さん（バレーボール）と星奈津美さん（競泳）、パラリンピアン横澤高德さん（チェアスキー）をお招きし、本センターの吉永武史の進行のもとシンポジウムが行われました。当日は、大雪の中、地域の方々にご来場いただき、下記の要領で盛会の裡に終了いたしました。

【開催概要】

日時：2017（平成29）年1月20日（金）18時30分～20時20分

会場：北広島町 千代田開発センター

主催：早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター

共催：広島県教育委員会

後援：北広島町教育委員会

参加者：約60名

プログラム：

15:10～ シンポジウム テーマ「“広島発” スポーツの力」

コーディネーター 齊藤一彦教授（広島大学）

シンポジスト 荻野正二さん（バルセロナ・北京オリンピック バレーボール競技 出場）

星奈津美さん（ロンドン・リオデジャネイロオリンピック 競泳競技 第3位）

横澤高德さん（バンクーバーパラリンピック アルペンスキー競技 出場）

進行 吉永武史（早稲田大学オリンピック・パラリンピック教育研究センター）

シンポジウムの冒頭では、進行の吉永より、「“広島発” スポーツの力」というシンポジウムのテーマのもと、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、広島からスポーツの価値をいかに発信していくことができるかについて考えを深めていく時間にしたいと開会の趣旨について説明がありました。

シンポジウムの序盤では、それぞれのシンポジストに用意された質問に答えていただきました。星さんには、甲状腺の全摘出手術を乗り越えてリオ五輪で銅メダルを獲得するまでの過程について伺いました。星さんは、当たり前のように毎日練習ができることに対して感謝の気持ちを持つことで、自分を極限まで追い込むことができたと答えられました。荻野さんには、ドーピング検査の経験について伺いました。荻野さんからは、目薬一滴だけでもドーピング違反になってしまう可能性があるため、重圧を背負いながら検査を受けていたというお話をいただきました。横澤さんには、障がい者スポーツの課題について伺いました。横澤さんからは、障がい者スポーツを支える人や環境を整備していくことの重要性についてお話をいただきました。

シンポジウムの最後には、広島地域の方々が2020年の東京オリンピック・パラリンピックにどのように関わっていけるのかについて、各シンポジストのお考えをお聞きしました。星さんは、オリンピック開催地の人々からの声援が力になったという自身の経験から、外国人選手に対して声援を送ることも良いのではないかと述べられました。荻野さんは、日本の選手だけではなく、海外のトップ選手同士の試合観戦を提案されました。横澤さんは、パラリンピアンとして、多くのボランティアに助けられてきた経験から、ボランティアとし

て東京オリンピック・パラリンピックに関わることもできるのではないかと述べられました。最後に、コーディネーターの齊藤先生は、東京に直接足を運ぶことができない人でも、スポーツの価値について理解し、広島にスポーツを根付かせ、スポーツを通して若い世代を育てていくことが、東京オリンピック・パラリンピックのレガシーとなっていくのではないかと述べ、シンポジウムをまとめられました。



荻野さん



星さん



横澤さん



コーディネーター齊藤先生と進行吉永

シンポジウム終了後の質疑応答では、来場者から、緊張した時や落ち込んだ時の気持ちの切り替え方についてご質問をいただきました。荻野さんは、親身になって相談に乗ってくれるような人を見つけること、星さんは、緊張はしても不安にはならないように、常に試合を想定しながら練習に取り組むこと、横澤さんは、初心にかえることのできる「原点」を見つけておくことが大切なのではないかと述べられました。3名のシンポジストのお言葉は、大雪の中いらしてくださった広島の地域の方々の心に響いているようでした。



集合写真